家庭科の授業を通じて「自分で考え判断できる子」を育てたい

Message to Students!

日々、生徒とさまざまな話をする教員生活は、365日同じ日がなく、学生時代には味わえないやりがいがあります。ほかの先生といろいろな目線で会話をし、生徒の親も含め、常に誰かと支え合う生活になり、関わり合う年代層が一気に広がります。教育実習に来る学生に対しては、常に教職のやりがいをそれぞれに見つけてほしいと思いながら指導をしていますし、彼らには現状維持に甘んじず、いくつになっても自分の可能性を求め続けてほしいと思っています。育児や介護など自分一人の力ではどうしようもないこともありますが、大切なのは自分が仕事を続けたい意志を声に出し、できることを精一杯やり、全てをひとりで抱え込まずにできないことはできないと伝えること。そうすると誰かが何らかの形で手を差し伸べてくれますし、家族も職場も協力をしてくれます。それらがあったからこそ、今まで教職を続けて来ることができたと実感しています。

本善 木子

Yoshiko Motoki

教育学部附属松本中学校・家庭科教諭

信州大学教育学部学校教育教員養成課程卒業。白馬村立白馬中学校、松本市立今井小学校、塩尻市立広陵中学校、安曇野市立明科中学校、松本市立信明中学校、安曇野市豊科北小学校、松本市山形村朝日村中学校組合立鉢盛中学校を経て、2011年より現職。

育児だけではなく、親の介護を見据えた対策の必要性も感じています

附属松本中学では毎年5月に公開研究会が行われ、赴任2年目には自分のクラスで家庭科の授業を行いました。豆腐の購入の観点について、普段あまり発言をしない子が友達と相談し合って手を挙げて意見を述べてくれた時はうれしかったですね。

大好きだった小学校の担任の影響で教員に

家庭科の教員として、2011年4月に信州大学附属松本中学校に赴任しました。現在は全学年、計12クラスの家庭科の授業と学級担任も務めています。

父が国語の教員、母が家庭科の教員だったこともありますが、もっとも影響を受けたのは小学校低学年の時の担任のおじいちゃん先生。その先生が大好きで、「学校の先生っていいな、私もなりたいな」と思うようになりました。先生とは卒業後も年賀状のやりとりを続け、私の結婚式にも参列していただきました。

家庭科という科目を決めたのは大学入学時。自分の中学時代は、家庭科の裁縫の時間にロックミシンで生地に穴を開けてしまうなど失敗ばかりでした。でも、だからこそそういう子どもの気持ちがわかるかな、と思ったのです。母と同じ家庭科を選んだおかげで、大学時代は先生よりも母にビシビシとしごかれました。

教員の醍醐味は課題を解決した子どもの笑顔

授業の時、子どもたちは「課題ができた」とか「分かるようになった」時にうれしそうな表情を浮かべます。家庭科は日常の生活課題を解決していく力を育成することが大事なので、課題解決的要素を取り入れて考えさせるようにしています。そうすると、生徒たちは真剣に悩んだり友達と相談したりしながら、試行錯誤の末にちゃんと解決策を導き出します。自分の力で伸びていく生徒の姿を見ると「教員をやっていてよかった」とやりがいを感じますね。

附属学校では、日々の授業をするだけではなく、研究もしなければなりません。校内での研究や教育学部の先生との共同研究もしています。附属ならではの研究のおもしろさを感じています。大学で男女共同参画の取り組みが行われており、スフレ通信などの配布があり、興味を持っています。家庭科は生活技術だけではなく、家族やジェンダー、消費者問題などの生活問題を幅広く扱う教科なので、男女共同参画にもふれています。

教師の難しさを感じるのは、生徒によかれと思ってやったことが伝わらない時。いかに本人が納得できるように導くか、そのアプローチの仕方は学年ごと、また一人ひとり異なり、見極めるためにももっと生徒たちと話をしなければと感じます。

女性教員を支えるために介護休業のさらなる改善を

家族は夫の両親と夫、高校生のふたりの娘と6人家族です。毎日の家事は、洗濯の関係は両親が担当し、私は台所関係を担当。毎朝出勤前に夕飯のおかずを作って出ます。帰宅が遅い私に代わって、娘たちは夕飯時に何か一品作って付け加えたり、食事の後片付けをしてくれます。そして、我が家は松本市郊外にあるので、娘たちの学校への送迎は市街地に勤める夫が担当。かつて娘たちが保育園に通っていた頃、送迎は両親にとてもお世話になりました。

今日まで仕事を続けて来られたのは、家族みんながこうして健康だったから。教員仲間の女友だちのなかには、親の介護で退職を余儀なくされる人が少なくなく、未だに教員を続けていられるのはほんのひと握りです。続けたくても続けられない状況にあります。というのも、育児休業は男女ともに取得できますが、介護は女性が受け持つことがほとんど。そして親というのは、実家の父母もいれば夫の両親もいます。でも介護休業は6ヵ月しか取得できないので、結果的に退職せざるを得ないのです。介護休業がもっと臨機応変に取得できるようになるとよいのに、と思います。私が出産した頃は、育休は1年間でしたが、今は3年間まで取得可能になりました。同様に介護休業にも時代に応じた改訂が加えられれば、もっと女性教員は働きやすくなるでしょう。幸い、私は今のところ親の介護の必要はなく、教師を続けられています。家事を分担してくれる両親には心から感謝しています。出勤前には「今日もお願いします」とひと言声をかけるように心がけています。